

絹文化に関する語彙の歴史と地理的変異

— 〈蚕〉を表す語を中心に—

絹文化！お国ことば調査プロジェクト（群馬県立女子大学）

佐藤 瑠香（4年）・小菅 友捺（3年）・長井 遥香（2年）
石川 未環（1年）・小田倉杏奈（1年）・小沼 音愛（1年）・戸川 茉衣（1年）

本研究では、辞書類や文学作品において〈蚕〉を表す語を収集し、その通時態を明らかにした上で、その実態を、現代日本語における地理的変異と照合して考察を行った。〈蚕〉を表す最も古い形式は、上代からみられる「こ」である。方言分布においても、「こ」を単独で用いる地域があるほか、造語成分に「こ」をもつ語形を用いる地域が圧倒的に多い。現在の方言分布にも、〈蚕〉が1音節語「こ」と呼ばれてきたことの痕跡があることを述べた。「かいこ」は『万葉集』にみられる「養ふ蚕」から生じた形式で、遅くとも中古には用いられていたと考えられる。方言分布をみると「かいこ」は全国に広い分布域をもっているが、西日本では、「かいこ」および、その語から音声変化した「けご」に敬意の造語成分を付した語形が分布域をもつ。このことから、「かいこ」は西日本を中心に用いられてきた語形であるといえる。また、東日本は、西日本と比べて多様な語形を造語しており、敬称を付した語形が多いことを述べた。

加えて、本研究では〈蚕〉や〈養蚕〉が描写される文学作品を精読し、各時代の絹文化の実態を考察した。上代の『古事記』や『日本書紀』では〈蚕〉の誕生が神話として描かれる。口から糸を吐き自らがつくった繭に引きこもるといふ〈蚕〉の神秘性や、生糸の貴重性が語られる。近世以降、〈蚕〉の描写はその有用性を強調するものが多くなる。〈蚕〉が農民の生活を経済的に支え、豊かにしてきたことの表れであると考えられる。方言分布では、〈蚕〉に敬称をつけた呼び方がみられるが、これは、養蚕が人びとの営みと、より密着するようになったことで、〈蚕〉を尊いものとする見方が起こったためであるとした。

0. はじめに

この報告書は、下の「1. 研究の目的」にしたがって行った研究活動の成果について、その概略をまとめたものである。研究成果の検証を行うための用例および詳細な記述は、次のWebページにおいて公開しているので参照されたい。

絹文化！お国ことば調査プロジェクト＞研究成果＞令和5年度絹ラボ 研究成果

<https://sites.google.com/mail.gpwu.ac.jp/kinubunkaokunikotoba>

1. 研究の目的

本研究では、〈蚕〉を表す語の考察を行う。上代から現代までの文学作品、辞書類における〈蚕〉を表す語を収集し、その通時態を明らかにする。その結果を、〈蚕〉を表す語の方言分布、すなわち地理的変異と照合する。これらによって、絹文化に関する語彙の多様性と歴史を明らかにすることを目的とする。

まず、国語辞典および古辞書における〈蚕〉を表す語を収集する。つぎに、上代から近現代の文学作品にみられる〈蚕〉を表す語を調査し、その通時態を考察する。さらに、時代ごとにくいつかの文学作品を選び、

その作品に登場する〈蚕〉の描写を精読し、各時代の文学作品にみられる絹文化の実態を把握する。最後に、〈蚕〉を表す語の通時態と地理的変異とを照合し、その関係性を明らかにする。

2. 国語辞典および古辞書における〈蚕〉を表す語

本研究に用いた国語辞典は、『日本国語大辞典』、『角川古語大辞典』、『時代別国語大辞典 上代編』、『時代別国語大辞典 室町時代編』、『邦訳 日葡辞書』である。古辞書は、『新撰字鏡』（享和本）、『倭名類聚抄』（二十卷本）、『増補 下学集』、『諸国方言 物類称呼』、『和漢三才図会』を用いた。辞書の記述を整理することによって、通時態の概略を把握し、文学作品における調査の方向性を探る。

2-1. 日本国語大辞典

『日本国語大辞典』では、〈蚕〉を表す語として、19語がみられた。「おかいこ」、「おしらさま」、「おほこ」、「かいこ」、「けご」、「けごじょ」、「こ」、「こがい」、「しろさま」、「ひめ」、「ひめっこ」、「むし」等である。

用例を確認すると、〈蚕〉を表す語の初出は、上代であった。『日本書紀』にはじめて〈蚕〉の描写がみられることがわかった。1700年代前期までは、「こ」、「かいこ」、「くわこ」の用例が多くみえる。一方で、1700年代後期以降は、それ以前に多くみられた「こ」はほとんどみられなくなっていくが、「おこ」や「おかいこさま」など、蚕に敬称を付した語があらわれるようになった。また、季節と蚕が結びついた語については、「はるご」、「なつご」、「あきご」が立項されていた。

2-2. 角川古語大辞典

『角川古語大辞典』では〈蚕〉を表す語として「こ」、「かひこ」、「おかひこ」、「なつご」、「はるご」の5語が立項されている。

「こ」が「蚕の古名」とされている。用例は、上代『万葉集』からみられる。「かひこ」では、中古から近世までの用例がみられる。「おかひこ」には近世の用例があるが、「ハア此の乞食はおかひこを着てゐる」の「おかひこ」は、絹の衣服のことを指しているという。そのほか「なつご」、「はるご」もみられる。なお、「けご」、「ひめ」などの語形は、『角川古語大辞典』には立項がないことを確認した。

2-3. 時代別国語大辞典 上代編

〈蚕〉を表す語として、「かひこ」、「くはこ」、「こ」、「ひめ」の4語がみられた。「こ」は、「かふ」が前接し「かふ蚕」と表されることがある。この「飼ふ」について同辞典では、「①飼う。動物を飼育する。②家畜などに飲食物を与える」と説明されていた。このことから、「飼ふ」は動物や家畜を育てるという意味で使われてきた語だということがわかる。「飼ふ」が動物や家畜に使用される一方、人の場合には「養^{やしな}ふ」という語が、特に乳幼児の養育については「ひたす」という語が使われていることがわかった。

『時代別国語大辞典 上代編』には、発音の区別を表すため、甲類には語の右側に、乙類には語の左側に傍線が引かれている。甲類、乙類とは、上代特殊仮名遣にみられる、イ段、エ段、オ段の発音の区別を示している。甲類とは、現在使われているイ、エ、オの発音と似たものであり、乙類とは、甲類に吸収され現在は消えてしまった発音である。蚕は甲類であることがわかっている。また、「こ」と発音する語のうち、甲類に分類されるものとして、籠・子・粉があげられていた。これらの語との混合を避けるために、「蚕」は早いうちに「こ」から「かひこ」という合成語になったのだと考えられる。なお、蚕の用例では、『日本書紀』雄略天皇条から蚕と子が混合していることがうかがえる。

2-4. 時代別国語大辞典 室町時代編

『時代別国語大辞典 室町時代編』では4語の〈蚕〉を表す語がみられた。「かひこ」、「くはこ」、「はるご」、「なつご」である。『時代別国語大辞典 上代編』に見られる一音節の「こ」では〈蚕〉を表さなくなり、合成語がみられた。また、「はるご」、「なつご」という時期と結びついた語もみられた。

2-5. 邦訳 日葡辞書

『邦訳 日葡辞書』において〈蚕〉を表す語は、「Caico かいこ（蚕）」、「Caigo かいご（卵・蚕）」、「Cuwaco くわこ（桑子）」、「Faruco はるこ（春蚕）」、「Natçugo なつご（夏蚕）」の5語がみられた。

「かいご」は「かいこ」の九州での呼び名であり、蚕の呼称に地域差があったことがわかる。また、『時代別国語大辞典 上代編』ではみられなかった「はるこ」や「なつご」といった時期と結びついた呼称がみられる。一方で、「さん」や「さま」などの敬称を付けた呼び方、一音節「こ」も立項がなかった。ほかに、「かこひ」、「ひめこ」、「こかげ」、「とどこ」といった語も立項はなかった。

2-6. 古辞書にみられる〈蚕〉

中古に成立した古辞書として、『新撰字鏡』、『倭名類聚鈔』、『類聚名義抄』がある。

日本最初の「漢和辞典」である『新撰字鏡』では、久禮乃弥々受くれののみみずという〈蚕〉の古名がみられた。そのほか3つの古辞書では、漢字表記は異なるものの、和訓は「かひこ」となっており、中古では「かひこ」が確立していたといえる。

中世に成立した古辞書としては『下学集』があげられる。意味分類体辞書である『下学集』では、和訓は「かいこ」とされている。

近世の『和漢三才図会』、『諸国方言 物類稱呼』においても和訓は「かいこ」である。図入り百科事典である『和漢三才図会』には、「かいこ」のほか「なつご」「はるご」の記述もみられた。江戸中期頃に成立した方言辞書である『諸国方言 物類稱呼』（以下、『物類稱呼』とする）には、「かいこ」のほか、「おこ」、「うすま」、「ほこ」、「ほぼう」、「とうどこ」、「きんこ」、「とどこ」、「ひめこ」の8語形がその使用地域ごとに示されている。近世においては「かいこ」が広く定着していたと考えられるが、方言資料である『物類稱呼』をみると、全国における〈蚕〉を表す語の多様性が見て取れる。「うすま」、「ほぼう」以外は、全て造語成分「こ」をもった語形である。また、「御」、「尊い」、「姫」を造語成分にもち、敬意の意味を込めた名付けをしている「おこ」、「とうどこ」、「とどこ」、「ひめこ」という語形もみられた。

3. 上代～近現代の文学作品にみられる〈蚕〉を表す語

3-1. 〈蚕〉を表す語の通時態

上代から近現代までの〈蚕〉の通時態について、各時代の文学作品にみられる〈蚕〉を表す語の用例を収集し、考察を行った。以下、小学館発行の『新編日本古典文学全集』は『新編全集』と省略する。

用例の収集には以下を使用した。

上代～近世

- ・コーパス検索アプリケーション中納言「日本語歴史コーパス」(国立国語研究所)
- ・「ジャパンナレッジ>詳細(個別)検索」(小学館)

近現代

- ・コーパス検索アプリケーション中納言「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(国立国語研究所)
- ・コーパス検索アプリケーション中納言「日本語歴史コーパス」(国立国語研究所)
- ・コーパス検索アプリケーション中納言「昭和・平成書き言葉コーパス」(国立国語研究所)

3-1-1. 上代

上代における〈蚕〉を表す語の用例は12例あり、語形は「こ」、「ひめこ」、「かひこ」、「かひご」、「くはご」がみられた。

最も古い例としては、『古事記』に「こ」がみられる。また、『日本書紀』には「かひこ」、「かひご」がみられた。『万葉集』では「こ」が「母が飼ふ^こ蚕の」という形で使われていたことから、「かひこ」、「かひご」は、「かう（飼う）」が「蚕」に連体修飾した「養^かふ蚕」が語源であり、〈蚕〉は人が飼育する生き物であるということに注目した呼び方であるといえる。

ただし、これらの形式は『新編全集』の振り仮名を参考にしており、編者が同時代の別の資料を参考に訓をつけている可能性がある。底本を確認したところ、漢字表記であり形式が確認できなかったため、不確定な形式であることに注意する必要がある。

なお、不確定とした形式のうち、「こ」は『万葉集』にもみられたため、遅くとも『万葉集』が成立した700年代には用いられていたといえる。「ひめこ」は表記が「蚕子」であるため、〈蚕〉を表す語であると考えられる。「くはご」は、表記と形式の両方が他の用例と異なるため、〈蚕〉を表す語だとは断定できない。しかし、「桑子」という表記から、桑を食べて成長するという特徴に着目した名称であると考えられ、〈蚕〉の属性とも重なるため、〈蚕〉を表すと考えることもできる。

3-1-2. 中古

中古の〈蚕〉を表す語の用例は6例あり、語形は、「こ」、「くはこ」、「かひこ」がみられた。

「こ」、「かひこ」は上代から使用されている語形である。「くはこ」は上代にみられた「くはご」から音声変化したものと思われる。

「かひこ」は上代では不確定な形式であるとしたが、「かいこ」と仮名で表記される文献が確認できることから、中古には「かいこ」という形式が確立していることがわかる。したがって、現在、〈蚕〉を表す語の共通語として使用されている「かいこ」は、遅くとも中古には用いられていたと考えられる。なお、「かひこ」とする振り仮名もみられる。

3-1-3. 中世

中世の〈蚕〉を表す語の用例は15例みられた。語形は、中古に引き続いてみられる「こ」、「かひこ」の他、「くはのこ」がみられた。

上代・中古で既に「かひこ」、「かいこ」がみられたが、中世においても「かひこ」とともに、「こ」が残っていることがわかる。ただし、『今昔物語集』の用例にみられる「こ」については、『新編全集』の振り仮名を参考しているため、不確定な形式である。「こ」はみられるものの、韻文のため、定型表現として用いられている可能性も残されている。

「くはのこ」は中古における「くはこ」から派生した語であると考えることができ、用例にはみられなかったが、中世においても「くはこ」が残っていた可能性がある。したがって、中世における〈蚕〉を表す語の形式は、中古からほとんど変化していないといえる。

3-1-4. 近世

近世の〈蚕〉を表す語の用例は5例あり、語形は「かひこ」、「かいこ」、「さうし」、「かこひ」がみられた。

近世の用例では「こ」は見られなかったことから、〈蚕〉を表す語としては「かいこ」がおおむね定着したと考えてよいのではないかと。

ただし、近世における〈蚕〉を表す語については、収集できた用例が非常に少ないため、用例以外の形式が用いられていた可能性も否めない。

3-1-5. 近現代

近現代の〈蚕〉を表す語の用例は明治から平成までで63例みられたが、「かいこ」以外の語形はみられなかった。このことから、明治時代以降は、〈蚕〉を表す語としては「かいこ」が完全に定着したと考えられる。〈蚕〉を表す語の方言形については4章で詳しく述べるが、近現代では方言形として「こ」の形態素を残す語形がみられることから、「こ」という形式の用例がみられなかった近世においても、地域によっては、「こ」という形態素を含む派生語が用いられていた可能性もあると考える。

3-2. 各時代の文学作品における〈蚕〉

3-2-1. 上代

上代の文献では、后妃が養蚕をするほか、神や皇后が〈蚕〉を歌に詠むこともある。『古事記』には〈蚕〉が這う虫、繭、飛ぶ鳥と3種の姿に変わるという記述もあり、〈蚕〉の性質が詳らかに書かれている。

(1) 散文

『古事記』や『日本書紀』では、〈蚕〉の誕生が語られる。

『古事記』では、オオゲツヒメがスサノヲに食事を振る舞おうとする場面でそれが描かれる。食べ物を鼻や口や尻から取り出して差し上げるオオゲツヒメの様子を見て、スサノヲはオオゲツヒメが食べ物を汚しているのだと思って殺す。その死体から穀物とともに〈蚕〉が生まれる。

『日本書紀』では、ある本の記述として火の神であるカゲツチがハニヤマヒメを娶って生まれたワクムスビの頭の上に、〈蚕〉と桑ができ臍の中に5種類の穀物ができたと記される。〈蚕〉が生まれる話はもう一つあり、これもある本の記述として記されている。ツクヨミノミコトがウケモチノカミのもとに行った際、ウケモチノカミは口から食べ物を出して差し上げた。それを怒ったツクヨミノミコトはウケモチノカミを殺してしまった。死んだウケモチノカミの頭には牛馬が、額には粟が、眉には繭が、目には稗が、腹には稲が、陰部には麦と大豆と小豆があった。その繭を口に含むと、すぐに糸を引くことができた。これが養蚕の始まりだとする。

〈蚕〉は穀物と同時に生まれている。このことは〈蚕〉が食物と同様、重要な役割を果たしていたことを意味するのではないだろうか。衣食住の食を穀物が、衣を〈蚕〉が担うのである。歴史的事実からすれば、蚕や養蚕は中国から伝えられたものであるが、それがこのように描かれていることは興味深い。

養蚕に関してはほかに、『日本書紀』雄略天皇条には次のような記述がある。

天皇、^{きさきみめ}后妃をして親ら^{みづか}桑^{くは}こかしめて、^{こかひのこと}蚕事^{すす}を勧めむと欲す。^{おもほ}爰に^こ螺^{すがる}嬴^{みことおほ}に命^{ひとのな}せて、螺嬴は人名なり。
此には^こ須^{すがる}我^い屢^くと云ふ。国内の^こ蚕^{あつ}を聚めしめたまふ。是に^こ螺^{あやま}嬴^{わか}、誤りて^{たてまつ}嬰兒^{たてまつ}を聚めて、天皇に^{たてまつ}奉献る。

『日本書紀』巻第十四、雄略天皇 / 『新編全集3 日本書紀②』 p.167

雄略天皇条には、雄略天皇が后妃に桑を摘ませて、養蚕を勧めようとして^{すがる}螺嬴に国内の蚕を集めさせたが、螺嬴は間違えて、〈蚕〉と同じ音である「子」、子どもを集めてきたという話である。

(2) 韻文

『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』に〈蚕〉を詠んだ歌がある。特に、『万葉集』では、〈蚕〉を表す語として「こ」が3例、「くはご」が1例みられる。次の歌のように、「こ」はすべて「たらち(つ)ねの母が飼ふ蚕の繭隠り」という序詞の形で用いられる。

たらちねの 母が飼ふ蚕この 繭まよごも隠り いぶせくもあるか 妹いもに逢はずして

『万葉集』 卷第十二、2991/『新編全集 8 万葉集③』 p.327

この序詞がどのような語を導いているのかに着目すると、「隠る」「いぶせし」「息づく」といった、閉塞感、窮屈さを感じさせる語であることがわかる。繭であれば、包まれている暖かいイメージがあっても不思議ではない。しかし、恋の歌ということもあり、ネガティブな心情が、〈蚕〉の比喩によって表されている。

3-2-2. 中古

中古の作品にも〈蚕〉は多く登場する。しかし上代とは異なり、〈蚕〉を詠んだり話題にしたりするのは、田舎に住む者、変わった人物であることがほとんどである。また、『伊勢物語』、『源氏物語』の用例は『万葉集』の歌をもとにした歌、表現である。当時の貴族の装束は絹織物だが、養蚕をしたり、〈蚕〉そのものを頻繁に目にしたりするのは、下位の貴族だったのだろう。『堤中納言物語』で姫君の周囲の人びとが虫を怖がっていることからそれがわかる。

(1) 散文

『うつほ物語』では、養蚕が書かれる。紀伊国牟婁郡に住む種松という富豪が、自分の娘と帝との間に生まれ、しかし娘である母親が亡くなったために帝に存在すら知られない源氏を、せめて紀伊国の中では国王の位に劣らないような生活をさせようと心を込めて養育する。〈蚕〉は、種松の豊かさを説明する場面で描かれる。

『源氏物語』浮舟巻では、匂宮の心内文に「こ」が用いられる。親に大事にされていて恋人にも会えず、窮屈な思いを言う。古歌の引き歌表現であって、匂宮自身が〈蚕〉を飼っているというわけではない。

『堤中納言物語』の虫めづる姫君は、〈蚕〉のことも話題にしている。虫を好む姫君に対し、親が毛虫などを好んでいるのはみっともないと論ず。そのときの姫君の発話に「かひこ」があらわれる。人びとが着る衣も、〈蚕〉からつくられる。〈蚕〉がまだ蝶にならないうちに絹糸にし、蝶になったら使えなくなってしまう。姫君が、絹のできる過程を詳しく知っているのは、姫君が虫を好む姫君だからこそであろう。

(2) 韻文

『伊勢物語』の和歌には「くはこ」の形で出現する。「男」が陸奥の国に行った際、そこに住む女に惹かれた。その女が男に詠んだ歌の中に、「くはこ（桑子）」が用いられている。物語の書き手は「ひなびたりける」と評価している。男はしかし女に会いに行き共寝をし、まだ夜の深いうちに出て行く。夜の深いうちに出るとするのは女への愛情が深くないことを表す。

また、〈蚕〉は仲睦まじい夫婦の喩えとして用いられることがある。『万葉集』の(33)の例では「人とあらずは」だったのが「恋に死なずは」となっていることにより、〈蚕〉になりたい理由がより明確に示されており、それで、〈蚕〉が命の短いものとしてだけでなく、恋が成就するということを示す語としても機能している。

〈蚕〉を詠んだ和歌からは、中古になっても依然、「こ」が〈蚕〉を表す語として受け止められていたことがうかがえる。

3-2-3. 中世

『今昔物語集』、『方丈記』、『道行きぶり』（和歌）、『文和千句第一百韻』（連歌）に、用例がみられた。

その中から、鴨長明『方丈記』を取り上げて考察を行った。長明は、年老いた自分を「老いたる蚕」とし、余生の庵をつくって住むという行為を蚕が繭をつくることにたとえている。以下の引用は『新編全集44 方

丈記ほか』を底本とする。

ここに六十の露消えがたに及びて、さらに末葉の宿りを結べる事あり。いはば旅人の一夜の宿を作り、老いたる蚕の繭をいとなむがごとし。これをなかごろの栖にならぶれば、また、百文が一に及ばず。とかくいふほどに齢は歳々にたかく、栖は折々に狭し。その家のありさま、世の常にも似ず。広さはわづかに方丈、高さは七尺が内なり。所を思ひ定めざるがゆゑに、地を占めて作らず。土居を組み、うちおほひを葺きて、継目ごとにかねがねを掛けたり。もし心になはぬ事あらば、やすく外へ移さむがためなり。そのあらため作る事、いくばくの煩ひがある。積むところわづかに二両、車の力を報ふほかには、さらに他
p.28-29

3-2-4. 近世

近世における〈蚕〉を表す語の5例のうち歌語の語義的説明の用例を除いた4例と、「こがひ（こ+飼ふ）」という形式で〈養蚕〉を表す用例1例を考察した。

近世の俳諧や俳文には、〈蚕〉は人びとの生活を支えるものであり、人間にとって単なる「虫」ではないことを強調したものがみられた。また、〈蚕〉を飼育する女性に焦点が当てられたものも確認できる。近世における俳諧、俳文からは江戸期の庶民の暮らしを窺うことができ、人びとの日常の営みのなかに〈蚕〉や養蚕に従事する女性の姿が存在していたといえる。

3-2-5. 近現代

近現代の文学作品として、群馬県出身の作家にちなんで、田山花袋の『田舎教師』、伊藤信吉の『風色の望郷歌』を取り上げて〈蚕〉を表す語の用いられる場面を考察した。

(1) 田山花袋『田舎教師』

田山花袋は栃木県（明治9年に群馬県に編入）邑楽郡館林町に誕生し、6歳から7歳、11歳から12歳の期間に上京しているものの、言語形成期は概ね群馬県館林市で過ごしている。『田舎教師』は、現在の埼玉県羽生市にある弥勒小学校に勤めていた小林秀三をモデルにした小説である。養蚕が物語に大きく関係することはないが、次に示すように、時期を説明するために〈蚕〉を用いている例がみられた。

蚕の上がりかけるころになると、町は俄に活気を帯びて来る。平生は火の消えた様に静かな裏通りにも、繭買入所などといふヒラ／＼した紙が張られて、近在から売りに来る人々が多く集つた。頬鬚の生えた角帯の仲買の四十男が秤ではかつて、それから筵へと、その白い美しい繭をあけた。相場は日毎に変わった。銅貨や銀貨をぢやら／＼と音させて、景気よく金を払つて遣つた。料理店では三味線の音が昼から聞えた。

「田舎教師」／『田山花袋全集 第2巻』 p.400

(2) 伊藤信吉『風色の望郷歌』

伊藤信吉は1906年に群馬県群馬郡元総社村大字元総社（現前橋市）に生まれ、1928年に22歳で上京しており、言語形成期を群馬県前橋市で過ごしている。『風色の望郷歌』は、「入り口」と1月から13月までの14章からなり、伊藤信吉が自らの少・青年期を回想しつつ、元総社を中心とした上州の生活を描いたものである。そのため、方言や養蚕ことばなどを積極的に使用しており、地の文にも、話し言葉に近いと考えられる箇所が多いことが特徴である。

また、『風色の望郷歌』は月ごとに章分けがされているが、最も収入につながりやすく大規模であった春

蚕の季節にあたる「6月」を中心に、一年を通して養蚕の話題に触れており、使用されている養蚕関連語彙の種類も豊富であった。このことから、信吉が、郷土の生活を書き表すのに、養蚕の話題が適していると考えていたことがわかる。加えて、内容からも村民の生活と〈蚕〉や養蚕が非常に密接に関わっていたことがうかがえ、〈蚕〉の存在が民衆の生活の一部に組み込まれていたと考えられる。

さらに、『風色の望郷歌』からは、近代における養蚕、〈蚕〉の捉え方が近世以前とは大きく異なっていることがうかがえる。養蚕は大変ながらも、家計を支える重要な産業であった。そのため、〈蚕〉を嫌うことなく、むしろ「お蚕さま」と敬称を付して呼び、かわいがったのであろう。時代が下るにつれて産業が発達すると、次第に養蚕は重要視されなくなっていった。現在では「おかいこさま」、「おこさま」と呼ぶことも少なくなったが、これは、養蚕が衰退し人びとが〈蚕〉に接する機会が減ったことで特徴的な呼び方が廃れたとも考えられるが、収入を養蚕に頼らなくなったことで、人びとが〈蚕〉に敬称を付す必要性を感じなくなったためとも考えることができる。

4. 〈蚕〉を表す語の通時態と方言分布の照合

〈蚕〉を表す最古の形式は「こ」である。図1では、広島、徳島、愛媛、熊本、長崎にみられ、西日本に点在して分布している。「こ」を単独で用いる地域があることに加え、造語成分に「こ」をもつ語形を用いる地域が非常に多いことから、上代から使用される1音節語「こ」がいまだに根強く残っている。「くわこ」も『万葉集』にみられる古い形式だが、これは青森、秋田、宮城、千葉、三重、広島、山口、佐賀に分布している。「こ」「くわこ」という古くからある形式は、現代ではかつて都があった近畿地方から離れた地域に分布している。

上代の文学作品および『物類稱呼』にみられた「ひめこ」を確認すると、「ひめっこ」、「ひめっこさん」という形式が静岡にみられた。文学作品にはみられず、『物類稱呼』に採録されていた「おこ」、「ほこ」、「ととこ」も図1に確認できる。「おこ」は、最も古い形式である「こ」に敬意を表す接頭辞「御」を付した形式である。図1で「おこ」は群馬、埼玉、島根に1地点ずつ確認できる。また、「御+こ+様」である「おこさま」は、岩手、宮城、山形、福島、栃木、茨城、群馬、埼玉、東京、神奈川に広がりを持って分布している。「ほこ」および「ほこ」に敬意の接辞を付した「ほこさま」、「おほこ」は新潟に分布している。「ととこ」は「尊い+こ」と解釈される語である。これは「とどこ」という形式で、青森、岩手、秋田に広い分布域をもち、福島にも1地点みられる。江戸中期頃に成立した『物類稱呼』にみられ、図1で確認できない語形は「うすま」、「ほぼう」、「きんこ」であるが、これらの語形は調査の際に収集されなかった可能性もある。

〈蚕〉を表す「かいこ」という形式は遅くとも中古には確立していたといえる。「かいこ」は図1において全国に分布しており、現代では、〈蚕〉を表す共通語として広く用いられているとわかる。「かいこ」の分布に関して、新井小枝子(2017)では、西日本ではその分布に広がりが見られる一方で、東日本では他の語形の分布域のなかに混在して分布しており、西日本と東日本では分布のありようが異なることが述べられている。加えて、西日本では、「かいこ」と、「かいこ」が音声変化した「けご」に敬意の造語成分を付した語形が分布域をもつことから、「かいこ」は西日本を中心に用いられてきた語形であることが指摘されている。

「おこ」、「おこさま」、「とどこ」など、「こ」に直接敬意の造語成分を付す語が連続した分布域をもつのは、青森、岩手、山形、宮城、茨城、栃木、群馬、埼玉、東京、神奈川である。西日本では、島根「おこ」「おこさま」、宮崎「おここ」という2地点のみの分布で、その他の地域は、「飼う+こ」に接尾辞「じょ」「どん」を付した「けごじょ」、「けごどん」、「かいこさま」、「おかいこさま」など、「こ」を含む合成語に敬意の造語成分を付す語および敬意の造語成分をもたない語形が分布する。「こ」に直接、敬意の造語成分を付す語も、「こ」「くわこ」の分布と同様、近畿から離れた地域で分布している。ことばは文化の中心である地点から外へと広がっていく。文化の中心でそのことばが変化、衰退した後も、周辺地域では用いられ続ける。そのた

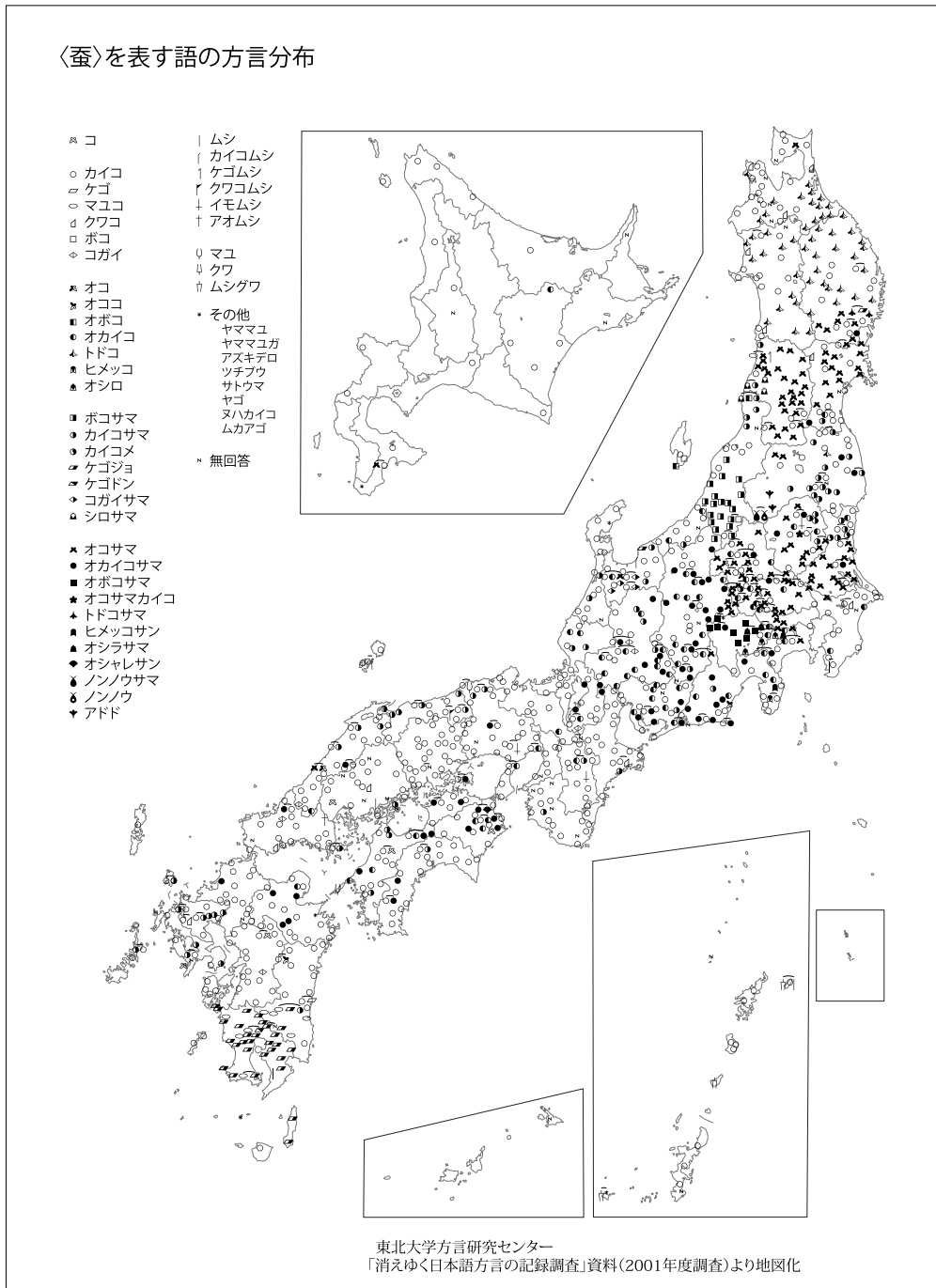


図1 新井小枝子 (2017) 「〈蚕〉を表す語彙—造語法と方言分布—」
『地域政策研究』19(4), 23-42, 高崎経済大学地域政策学会

め、「こ」に直接、敬意の造語成分を付す語は、「こ」を含む合成語にあらためて敬意の造語成分を付す語より古い形式であると考え。

以上に述べたように、〈蚕〉を表す形式は地域によって異なる。語形の多くは「こ」がベースとなっているながらも、東日本では「かいこ」以外の語形が多く見られるのに対し、西日本では「かいこ」が主に用いられるという違いがあること、また、敬称を付した語が東日本に多いという点から、「こ」がそれぞれの地域で異なる変容を遂げたということがわかる。



図1の方言分布と本研究の文献での調査結果を照合すると、図1では、文献にみられた「こ」、「くわこ」、「かいこ」以外にも、「おしろ」、「のんのう」、「むしぐわ」などの多様な形式が確認できる。近世までの文学作品にはそのような呼称はみられないため、古くはそれらの呼称は存在していなかったようにみえる。しかし、音声言語である方言は文字化されないことが多い。それらの語形は、音声でのコミュニケーションでは用いられていたと考えられるものの、いつの時代に位置づけられるかは不明である。

5. 今後の課題

本研究で残した課題を述べる。〈蚕〉を表す語の通時態を考察するにあたり、その用例収集に「日本語歴史コーパス」、「ジャパンナレッジ」、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」、「昭和・平成書き言葉コーパス」を用いている。そこで底本とされていなかったために、本研究で扱うことができなかった文学作品も多い。特に、和歌や俳諧に詠まれた〈蚕〉について、その用例を幅広く収集し体系的に考察を行いたい。3-2-5では近現代の文学作品のなかでも、群馬県出身の作家を取り上げている。調査対象を養蚕先進地域である群馬県の作家以外にも広げ、作品に描かれる養蚕業の実態を文学という面から再考したい。方言調査を行い、文献に現れない〈蚕〉を表す語彙を調査することも課題である。

参考文献

- 阿部秋生ほか校注・訳『新編日本古典文学全集25 源氏物語⑥』（小学館、1998）
新井小枝子「〈蚕〉を表す語彙—造語法と方言分布—」（高崎経済大学『地域政策研究』第19巻第4号、2017年）
伊藤信吉『風色の望郷歌』（煥乎堂・1991）
伊藤信吉『伊藤信吉著作集 第6巻』（沖積舎・2001）
井本農一ほか注解『新編日本古典文学全集70 松尾芭蕉集①』（小学館・1995）
井本農一ほか注解『新編日本古典文学全集71 松尾芭蕉集②』（小学館・1997）
植垣節也ほか校注・訳『新編日本古典文学全集5 風土記』（小学館・1997）
上坂信男『伊勢物語評解』（有精堂・1968年）
片桐洋一ほか校注・訳『新編日本古典文学全集12 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（小学館・1994）
金子金治郎ほか注解『新編日本古典文学全集61 連歌集 俳諧集』（小学館・2001）
神田秀夫ほか校注・訳『新編日本古典文学全集44 方丈記 徒然草 正法眼蔵随聞記 歎異抄』（小学館・1995）
京都大学文学部 国語学国文学研究室編『天治本 新撰字鏡』（臨川書店・1967年）
京都大学文学部 国語学国文学研究室編『諸本集成 倭名類聚抄』（臨川書店・1968年）
京都大学文学部 国語学国文学研究室編『諸国方言 物類稱呼 本文・釋文・索引』（京都大学国文学会・1973年）
雲英末雄ほか校注・訳『新編日本古典文学全集72 近世俳句俳文集』（小学館・2001）
近世文学史研究の会編『増補下学集・上巻』（文化書房博文社・1967年）
小島憲之ほか校注・訳『新編日本古典文学全集8 萬葉集③』（小学館・1995）
小島憲之ほか校注・訳『新編日本古典文学全集2 日本書紀①』（小学館・1994）
小島憲之ほか校注・訳『新編日本古典文学全集3 日本書紀②』（小学館・1996）
小島憲之ほか校注・訳『新編日本古典文学全集4 日本書紀③』（小学館・1998）
小町谷照彦校注『新 日本古典文学大系 7』（岩波書店・1990年）
上代語辞典編集委員会編『時代別国語大辞典 上代編』（三省堂・1987）
田山花袋『田山花袋全集 第2巻』（文泉堂書店・1973）
寺島良安編、和漢三才図会刊行委員会編集『和漢三才図会』（東京美術・1970年）
土井忠生ほか編訳『邦訳 日葡辞書』（岩波書店・1980）



- 徳富健次郎『蘆花全集 第6巻』(蘆花全集刊行会・1928)
- 長崎健ほか校注・訳『新編日本古典文学全集37 中世日記紀行集』(小学館・1994)
- 長崎健ほか校注・訳『新編日本古典文学全集48 中世日記文学紀行集』(小学館・1994)
- 中野幸一ほか校注・訳『新編日本古典文学全集14 うつほ物語①』(小学館・1999)
- 中村幸彦ほか『角川古語大辞典』(角川書店・1982-1999)
- 日本国語大辞典第二版編集委員会, 小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典 第二版』(小学館・2000-2002)
- 正宗敦夫編『類聚名義抄』(風間書房・1977)
- 正宗敦夫編『倭名類聚抄』(風間書房・1977)
- 三谷栄一ほか校注・訳『新編日本古典文学全集17 落窪物語 堤中納言物語』(小学館・2000)
- 宮尾登美子『仁淀川』(新潮社・2000)
- 室町時代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典 室町時代編』(三省堂・1985-2001)
- 山口佳紀ほか校注・訳『新編日本古典文学全集1 古事記』(小学館・1997)

参考Webページ

国立国語研究所「中納言コーパス」<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

山形県企画調整部土地対策課編集発行『土地分類基本調査 尾花沢』(1980)

国土交通省 国土数値情報ダウンロードサイト>土地分類調査・水調査>5万分の1 都道府県土地分類基本調査(山形県) <https://nlftp.mlit.go.jp/kokjo/inspect/landclassification/land/5-1/prefecture06.html#prefecture06>